

保 育

思考力の芽生えを培うための環境・援助のあり方とは

—共通の目的に向けて友だちと一緒に試行錯誤する5歳児の姿から—

中山 芙 充 子

1. はじめに

現在、幼稚園における5歳児の教育のあり方が問われている。4歳児の時代に育んだ力を、5歳児の保育がさらに育てているのか、ややもすれば、4歳児の時とそれほど変わらない教育環境が5歳児にとってはもの足りないものになっていないか、5歳児の学びを単純に小学校的なものにすればよいという短絡的な結論に陥っていないかなどの視点から、5歳児の保育の内容・方法が問われている。¹⁾

このような問いが問われる中、昨年度、4歳児の思考力の芽生えを培うための環境・援助のあり方について考察した。この研究から4歳児では、一人ひとりの遊びの中で心弾ませて思わずいたり触れたりしている時、心ゆくまで感じたり考えたり試したりを繰り返して遊んでいる時などに、思考力の芽生えを育む場面が見られた。つまり、4歳児では、個々の活動を充実させることで、思考力の芽生えが培われていくことが分かる。

その上で、今年度は、4歳児で培った思考力の芽生えを、5歳児でさらに培いながら発揮していくために教師はどのようにかかわればよいのだろうかと考えた。

5歳児は、仲間意識が育ち関係が深まり、「協同的な学び」の活動として共通の目的をもって活動することが楽しいと感じられる時期である。これは、3歳児、4歳児の発達の成果として5歳児たちは他の幼児と関わる自制力を身に付けてきており、他者と関わりながら遊び、学びを深めていける発達段階に入ってきているからである。

また、砂上は「協同的な学び」の活動を「5歳

児が、グループで協力して自分なりに考えながら目的に向かって問題を解決していく活動」と定義し、「この活動の中で試行錯誤したり話し合ったりすることを通して、子どもの思考力はさらに培われ、かつ大いに発揮される」と述べている。²⁾

平成20年改訂の幼稚園教育要領でも、領域「環境」に「思考力の芽生えのとらえ」として新たに「他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自ら考えようとする気持ちが育つようにすること」³⁾ という文言が加わり、特に5歳児で「友だちとのかかわり合い」によって、「思考力の芽生え」を培うことが重要視されている。

つまり、5歳児では、共通の目的をもって、試行錯誤したり、自分なりに感じたことや考えたことを友だちと伝え合ったりしながら、みんなで力を合わせて実現に向かっていく「協同的な学び」の活動の過程で、さらに「思考力の芽生え」が培われていくのではないだろうか。

そこで、本研究では、5歳児の「協同的な学び」の活動の事例をもとに、「友だちとのかかわり合い」の中で5歳児の「思考力の芽生え」を培うための環境構成や援助のあり方を探っていきたい。

2. 研究の構想

(1) めざす子どもの姿

5歳児は、友だちと目的を共有しながら、考えたり工夫したりして遊びをつくりだしていく時期である。

本園の5歳児もこれまでの研究を通して、子どもたちが小グループやクラス全体で継続してかか

わって遊ぶ姿や、自分たちの発見や表現を広げたり深めたりする喜びを感じる姿が見られるようになってきた。しかし、一人ひとりを丁寧に見ていくと、問題にぶつかったときに、すぐにあきらめてしまったり失敗を恐れて躊躇したりして思いを実現できない姿が見られる。

そこで、子どもが環境に主体的にかかわって遊ぶ中で出会う問題や困難を伴う状況の解決に向けて、すぐにあきらめずに友だちと一緒に試行錯誤したり考えを出し合ったりしながら、思いを実現して満足感や達成感を得られるようにしたいと考えた。そして、5歳児が「協同的な学び」の活動の中でこのような経験を積むことを通して、思考力の芽生えを培っていきたいと考え、本研究のめざす子どもの姿を次のように設定した。

自ら環境にかかわり、共通の目的に向かって友だちと考えを出し合いながらあきらめずに試行錯誤し、思いを実現する子ども

(2) 具体的方策

めざす子どもの姿を受けて、「友だちとのかかわり合い」の中で「思考力の芽生え」を培うための環境構成や援助のあり方を次の通りに考えた。

- ・目的が生み出されるような心動かす環境構成や教師の援助
- ・子どもの気づきや考えなどに共感し、周りの友だちとも共有していく教師の援助
- ・教師や友だちと一緒に解決・実現のための方法を考える場を設定したり、友だちとのかかわりをつないだりする教師の援助
- ・目的を実現するまで継続的に取り組める環境構成

これらの環境構成や教師の援助をもとに、実践を積み上げていきたい。

3. 実践事例（5歳児）

実践例1 「アゲハを助けよう大作戦！」

<背景>

クラス前の柑橘系の木に青虫（アゲハの幼虫）

を発見したことをきっかけに、クラスで幼虫を飼育していた。幼虫からさなぎになり、ある朝1匹が見事なアゲハ蝶になっていた。羽化に喜び観察する子どもたち。そのアゲハに止まり木を立ててあげようとA男が蓋を開けた瞬間、アゲハは一番高い天窓に飛んでいき外へ逃げられなくなってしまった。

①6月20日「アゲハを助けよう」

アゲハ蝶が外に出ようとバタバタと飛んで天窓にぶつかる様子を見たA男は、そのことを教師に伝える。教師が「どうしよう？」と投げかけると、「虫捕り網があったらいいよ。借りてくる」と言って取りに行くが、あいにく網の修理中で使えなかった。

その様子を見て、B女が「みんなで作ればいいよ。割り箸をいっぱいつなげたら上まで届くよ」とアイデアを出し、「それいいね」「僕もする！」とC男、D男も一緒にすることになった。そこで、教師は割り箸やストロー、テープ類を十分に用意した。割り箸をつなげて棒を作っている様子を見ていたE男が「棒だけじゃだめよ。網がない」と言いにくる。教師が「そっか、網はどうやって作ろうか？」と聞くと、「これいいよ」とビニール袋を握りしめてF女がやってくる。「でもこれピラピラしてて網みたいじゃないよ～」と言うE男に、「ここ（入れる部分）に、広告とかで丸作ってつけたら網になるよ」と言うF女。E男も「それなら、網みたいかも」と納得し、一緒に網を作り始めた。広告がついて網の形になると、ちょうど割り箸の棒も長くつながっていた。F女が「網できたよ」と割り箸をつなげていたB女たちのところに持っていくと「F女ちゃん、ここに（網）つけて」とB女が答え、割り箸の先にセロテープでつなげていった。教師が「立派な網ができたね」と言うとF女もE男も満面の笑顔になる。そして、F女は「チョウチョが苦しいからビニールに穴をあけるんよ」と

言って、さらに鉛筆で穴をあけ、割り箸の虫捕り網が完成！いよいよ、アゲハを捕まえようということになった。

棚の上に登り棒を持ち上げると、網がアゲハに届きそうになったその瞬間、ポキン！と割り箸の継ぎ目が折れてしまった。修理をして再挑戦！周りで見ている子どもたちも「もう少し！」「もっと右！」と必死に応援するがうまく捕まえられない。結局アゲハ蝶は窓のサンに入り込み、網で捕まえられなかった。

網を作る以外にも、アゲハ蝶を気絶させて捕まえようと、広告紙で紙飛行機を作り、アゲハ蝶めがけて投げているグローブや大声を上げてアゲハ蝶を驚かせようとする子どもたちがいた。

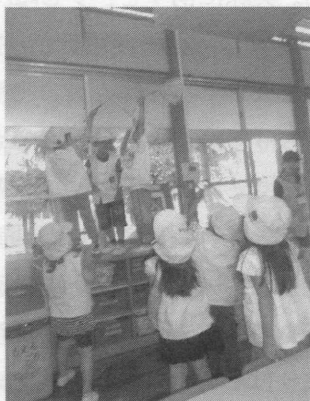


図1 作った網でつかまえよう！

【考察】

①では、アゲハを助けようとする子どもたちの思いを受け止めながら、必要に応じて素材を用意することで、思いが継続し、友だちとのやりとりが膨らんでいった。子どもがやってみたくと思ったその時を見逃さずに、教師が必要な素材を用意することで、子どもの意欲が高まり、子どもがそれまでの経験を生かしながら考えたり試したりすることにつながっていくと考える。

②6月20日「クラスで話し合おう」

クラスで子どもたちが集まり、アゲハを助けようと工夫したことを紹介する場を教師が設

けると、アゲハ蝶がこのままだと死んでしまうため、どうしたらよいかという話し合いになっていった。「僕たちは、お弁当食べたけど、チョウチョは何にも食べてないよ」「ご飯も食わずに、お腹すいとるかも」「お花があつたらおりてくるかもしれんよ」「でもお花はどうしようか？」「お花を摘んでこよう！クローバーの白い花がいっぱい咲いてるよ」「きく組（自分たちのクラス）の前の花（プランター）を部屋に入れといたら、明日の朝にはおりてきとるかもよ」ということになった。その後、シロツメクサの花束を花瓶に挿したり、プランターのベコニアなどを部屋に置いたりして、心配そうに降園していった。

【考察】

①と②において教師は、子どもたちの考えを価値あるものとして共感し、認め、疑問を投げかけながら気づきを促すようにかかわった。また、他者とのかかわりの中で、感じたことや考えたこと、自分なりの気づきを広げるために、友だちと考えを話し合い共有する場を設けた。その中で子どもたちは蝶を逃がすために、今までの体験から得た知識をもとに考え、友だちと話し合う中で自分たちが考えられるだけの方法で試し、新しいアイデアを生み出していた。

③6月21日「みんなで逃がそう」

子どもたちの願いが通じたのか、次の朝、花の近くにアゲハがおりてきた。また天窓に逃げてはいけなないので、朝一番に来たG女と一緒に飼育ケースにかえした。無事に下りてきたことを知り、みんな喜んで飼育ケースを覗きこんでいる。しかも、この日は残りの3匹も羽化して計4匹が蝶になっていたため、クラスで相談し、裏庭の大きな花の近くで逃がすことになった。クラス全員で、ヒラヒラと飛び立った4匹が見えなくなるまで「チョウチョさん、ばいば〜い！」と見送った。



図2 チョウチョさん、ばいばーい！

【考察】

子どもたちが考え、試した方法が正しいかどうかはともかく、いろいろ考えて繰り返し試す中で、結果として蝶を無事助けることができた。そのことは「やっぱり〇〇だった」という自分なりの納得や自信、「私たち、ぼくたちが逃がしてあげた」という満足感や自己肯定感をもつことになり、もっとやってみようとする意欲や自ら考えようとすることの喜びにつながった。

実際に自分たちがアゲハ蝶の幼虫を飼育し羽化させたという体験を通して、子どもたちにはアゲハ蝶への愛着や親しみの感情が生じていた。その思いが突然起こった問題に対して好奇心を抱き問題を解決しようと、友だちと考えを出し合ったり、試行錯誤して助ける方法を見つけ出そうとしたりする意欲を生じさせることにつながったと考えられる。このように、身近なものへの自発的な興味や関心を広げ、共通の目的に向かって繰り返し試行錯誤したり、友だちと考えを出し合ったりしていく協同的な活動が生まれるためには、子どもが生活や遊びの中で得た様々な感情をゆさぶる体験が不可欠である。そのために教師は、子どもが心を動かし、遊びに没頭し、とことん追求できる体験を積み重ねることができるようにかかわることが大切である。

実践例2

「日本一こわ〜いお化け屋敷を作ろう！」

＜背景＞

本学園では、毎年秋に幼小中合同のふれあいバザーが行われる。このとき、小学6年生が「お化け屋敷」を開くことが恒例となっている。バザーが近づき、去年お化け屋敷に行ったことを思い出したA女とB女が「私たちもお化け屋敷しよう！」「そういえば、去年のきく組さん（5歳児）もお化け屋敷してたよね」といって、紙にお化けを描き、お化け屋敷ごっこが始まった。

① 10月11日

「お化け屋敷を作ろう！」

H女、I女のお化けに教師が驚きながら逃げていると、J女とK女がやってきた。「こんなに明るかったら、お化け屋敷じゃないよ。暗くしないと。せんせい、電気消してもいい？」と聞いてくる。実際に消すと、少し暗くなるが窓から日差しが射し込みまだ明るかった。「あんまり暗くならんね」とH女。そこで、教師が「どうしたら、もっと暗くなるんだろうね」と4人に投げかけると、「黒い紙とか新聞とか窓に張ったら？」とJ女。そこで、新聞や広告紙、黒いポリ袋を用意する。すると、早速セロテープ台と椅子を持ってきて、どんどん新聞や広告紙を窓に貼りはじめた。

この日は、クラスの南側の窓だけ、新聞紙を貼って暗くしていった。教師は、引き続き楽しめるように、場をそのままに維持していった。

帰りに、4人でお化け屋敷を作っていることをクラスで紹介する場を設けると、「僕も（私も）やりたい！」という声が上がった。

【考察】

J女のお化け屋敷のように暗くしたいけれど、思うように暗くならないという問題に対し、教師は「どうやったら暗くなるんだろうね？」と周りの友だちにも問いかけてつなげていった。そこで、新聞などを貼って暗くする新しい考えが生まれていった。このように子どもたちから疑問や問題が生じた時に、1人だけの問題に終わらせず、友だ

ちと一緒に考えられるように、友だちとのかかわりをつないだり、必要に応じて材料を用意したりすることで、あきらめずに取り組む意欲につながっていくと考える。



図3 窓に新聞紙をつけて暗くしよう

② 10月12日

「こんなお化け屋敷、全然怖くない！」

次の日、朝から数人の子どもたちがお化け屋敷を作り始めた。去年のきく組が机でトンネルを作っていたことを思い出し、E男とF男が机をつなげて並べ始め、トンネルができて始めた。

またビニール袋に目の穴をあけ、お化けになりきったり、お化けのお面をかぶって驚かしたりする姿も見られる。

クラスで楽しんでいると、隣のクラスの5歳児がお化け屋敷に気づき客としてやってきた。ところが、ひと通り回ると「こんなお化け屋敷、ぜ～んぜん怖くない！」と言って、残念そうに帰って行ってしまった。

③ 10月12日

「日本一怖いお化け屋敷にするために、クラスで話合う」—共通の目的を生み出す—

「こんなお化け屋敷、ぜ～んぜん怖くない！」と残念がっていたことをクラスで集まった時に知らせると、「日本一怖いお化け屋敷を作ろうや」という声があがり、「どうすれば怖いお化け屋敷になるのか」という話し合いになっていった。「まだ、窓に新聞が貼れていないとこ

ろがあって、明るいよ」「もっと暗くなるように、全部の窓に貼ろう！」「お化けが少ないから、もっと作った方がいいよ」「おっきい段ボールにお化けいっぱい絵を描いて壁を作ったら？」「おばけを上からぶら下げたらいいよ」「机の下が暗くなるように、段ボールとかを周りにつけたらいいよ」「机ももっとつなげて長くしよう」という話になり、お化けを描いたり作ったりするグループ・窓に新聞紙を貼るグループ・トンネルを作るグループなどに分かれて、友だちと相談しながら作るようになった。

【考察】

②の「このお化け屋敷、ぜんぜん怖くない」という言葉は、より本物らしさを求める5歳児だからこそ出た言葉ではないだろうか。③ではこの言葉をクラス全体になげかけることで、“日本一怖いお化け屋敷を作りたい”という共通の目的が生まれていった。そのことで、子どもたちの「どうしたら怖くなるのかな」「こうしたらどうだろう」という探究心を刺激し、お化け屋敷づくりのさらなる工夫へと駆り立てていった。このことから、子どもの気づきや問題を見逃さずに取り上げ、クラスで解決・実現のための方法を考える場を設けることで、子どもの探究心が刺激され、一人では解決できないことも、友だちと考えを出し合いながら試行錯誤していこうとする意欲につながっていくと考える。

④ 10月12日

「怖いトンネルを作ろう！」

机を並べてトンネルを作っているグループは、段ボールを机の横にガムテープで貼りつけてどんどん長く作っている。

すると突然、K男とL男が段ボールカッターを持ってきて、せっかく貼った段ボールに穴をあけ始める。教師が驚いて「どうしたの？」と聞くと「ここに穴をあけて、手が出るようにするんよ」とK男が言う。「絶対、びっくりするじゃろ」とL男も得意げに言う。「面白い。突

然手が出てきたら怖いね〜。よく考えたね」と教師が言っていると、M男が寄ってきて様子を見始めた。しばらく見ていると「全部切ったらだめよ!」とM男が言い出す。「なんでよ!切らんと、手が出せんじゃん」とK男。「違うんよ。全部切ったら明るくなるじゃろ。パカッと開くようにしたらいいんよ」とM男。「パカッとどうやるん?」とK男が言うと、「ここ(上)とここ(左横)とここ(下)だけ切って、ここ(右横)は切らんの。そしたら、パカッと開くんよ」と開き扉のようになるようにM男が指でなぞりながら説明する。「ああ、分かった、家の扉みたいにするんじゃ」「そうそう」とM男。「そうじゃね。暗いところに手がいきなり出てきた方がびっくりするわ」とK男も納得し、開き扉のような小さな窓を作った。

出来上がり、教師も子どもたちと実際に通って驚かし合っていると、「いいこと考えた!」と言いながらL男がトンネルから飛び出てきた。「手だけじゃなくて顔が出てきたたら、もっとびっくりするんじゃない?」と言うと、K男が「それいいね。じゃあ、おっきい穴があるね」と頭が通る大き目の開き扉を作っていた。

【考察】

トンネルづくりの中で、「(〇〇から)手が出るようにしたい」という目的をもつが、穴からにするか開き扉からにするかでイメージのぶつかり合いが生じる。そこでM男は、自分のイメージをどのように言葉や表現で説明すれば分かってもらえるか考え、指でなぞりながら言葉を添えて自分なりに表現して伝えていった。そのことでお互いのイメージを共有することができ、さらに「開き扉から頭を出す」などの新しいアイデアも生まれている。このように5歳児では、イメージのぶつかり合いでの葛藤を乗り越えて目的を達成していく過程の中で、思考力の芽生えが育まれていくことが分かる。

このイメージのぶつかり合いの場面では、教師

が全面に出て折り合いがつくように援助をするのではなく、あえて教師の援助を最小限にとどめたことで、子ども自身が葛藤と向き合っていた。つまり5歳児のぶつかり合いの場面で教師は、一人ひとりの表現の特性を考慮に入れて子どもの思いや葛藤を受け止めるとともに、周囲の幼児がどのように受け止めて行動するかを見通しながら寄り添い援助していく必要があると考える。



図4 お化けのトンネルを作ろう

⑤ 10月13日

「お客さんを呼ぼう」

お化け屋敷が出来上がってくると、お客さんを呼ぼうという声があがる。「お客さん、呼ぶならチケットがいるね」と言って作り始める。最初は、チケットに「お化け屋敷」と字で書いていたが、「もも組さん、字が読めれんかも」と言って、お化けの絵だけ描いたカードを作っていた。

また、「もっとお客さんに来てもらうために、全部通り終わったら、プレゼントあげるっていうのはどう?」「それいいね。」と言って、プレゼントを早速作り始めた。チケットができてくると、「僕が小さい組さんにチケット配ってお客呼んでくるね」と言うと、「私も行く!」と言って、走っていった。

受付では、「お化け屋敷、始まりまーす!プレゼントももらえますよー!」と宣伝し始めた。客が集まってくると、「じゅんぴちゅう」と書いて看板に貼りつけ、「もう少して開きま

す。並んで待ってください」と並べる子どもでできた。

客が入ると、「ここが洞窟のスタートです」と言って案内している。お化け役の子は、客が驚けば驚くほど張り切って驚かす姿が見られた。いつの間にか、役割分担をして、お化け屋敷を楽しんでいった。保育室内の半分以上がお化け屋敷で埋め尽くされたが、子どもの思いを継続するために、場をそのまま維持していった。すると、他クラスにも、きく組ではお化け屋敷をしているということが浸透し、「今日は、いつお化け屋敷が開きますか?」と聞きに来たり、開店前に並んだりする姿も見られていった。

この遊びは、少しずつ変化しながらも次の週まで続いた。



図5 おばけ屋敷が始まるよ

【考察】

「お化け屋敷」が出来上がってくると、年中や年少の子どもたちを客として招待した。チケットやポイントカードを作る幼児、チケットを配りながら宣伝をする幼児、たくさん来てもらえるようにとプレゼントを作る幼児と、客を呼びたいという共通の目的に向かって、それぞれが声をかけ合って役割を分担し活動をしている。このような遊びの様子を見ると、5歳児の遊びの中で、「客を呼ぶ」という状況をつくるということは、その目的に向かうために幼児が様々な方法を試す機会につながると考えられる。また、客とのかかわりから、もっと驚かしたいという気持ちが生じ、どのようにしたら驚かすことができるか幼児なりに

考えている。人とかかわりから、遊びをさらに面白くしようとする思いが幼児の思考につながるのだろう。

今回のお化け屋敷は、4歳児の頃に5歳児が作ったお化け屋敷を見たり遊ばせてもらったりした経験が大きな影響を及ぼしている。それは、①で去年のお化け屋敷が活動のきっかけになっていたことや②で去年の5歳児のまねをして机のトンネルを作り始めたことからよく分かる。

そして、この経験が土台となり、④の開き扉から手や頭が飛び出すというさらなる工夫が生まれていった。このことから、4歳児の頃に、年上の遊びを見たり参加したりすることも、子どもたちのあこがれとやってみたいという意欲を育むために有効である。4歳児の時期に必要な経験を積み重ねてきた子どもたちが5歳児では、一人ではできないことを友だちとアイデアを出し合いながら進めることで、遊びが盛り上がり実現すると考える。

4. 実践を終えて

5歳児の思考力の芽生えを見つめたとき、4歳児での経験の積み重ねが大切であることが分かった。また、考えたことを友だちに伝えたり、友だちの考えに耳を傾けたりする中で、思いの実現に向けて互いに遊びを構成していくことが、5歳児の思考力の芽生えを培うことにつながることも分かった。このことから、5歳児の思考力の芽生えを培うための環境・援助のあり方について大切だと思われる点が次の通り明らかになった。

①目的が生み出されるような心動かす環境構成や教師の援助

友だちと思いや考えを共有する活動や共通の目的が生まれるためには、日々の保育の中で子どもたちが「このことをみんなに伝えたい」という心を動かす体験が不可欠である。子どもの興味関心に応じ、疑問や目的をもつきっかけになるような道具や材料を用意したり、子どもが心を動かし、遊びに没頭し、とことん追求できる体験を積み重ねることができるようにかかわったりすることが

大切である。

②子どもの気づきや考えなどに共感し、周りの友だちとも共有していく教師の援助

子どもが自分で始めた遊びの中での気づきや考えに共感し、その気づきを周りの子へ共有することにより、友だちの考えから刺激を受けて思考が広がったり、新たな疑問を見出したりすることにつながっていく。そのため、クラスでの伝え合いの場だけでなく、自分で始めた遊びの中でも子どもたちが他の子の思いや考えに触れ、子どもが互いに言葉で伝え合うように援助することが大切である。

③教師や友だちと一緒に解決・実現のための方法を考える場を設定したり、友だちとのかかわりをつないだりする教師の援助

子どもたちが、共通の目的に向かって試行錯誤したり友だちと考えを出し合ったりしながら、思いを実現していくには、あきらめずに自分なりの方法でやってみようとする意欲をもつことができるような援助が必要である。特に5歳児は、友だちと共通の目的をもって話し合いながら試行錯誤することができる時期である。そのため、教師は、子どもたちから疑問や問題が生じた時を見逃さずに取り上げ、1人だけの問題に終わらせず、友だちと一緒に考えられるように、クラスで紹介する場を設けたり、友だちとのかかわりをつないだりしていくことが大切である。

④目的を実現するまで継続的に取り組める環境構成

5歳児の「協同的な学び」の活動で、問題や疑問を乗り越えて当初の目的を実現していくには、長い道のりを必要とすることがある。お化け屋敷の事例では、子どもたちが継続的に活動に取り組めるように場を維持したことで、これまでの工夫にさらに、友だちと一緒に考えたことをつけ加えながら試行錯誤していく姿が見られた。このことから、共通の目的に向けてあきらめずに試行錯誤して目的を実現するためには、継続的に取り組むことのできる時間や場を確保することが大切である。

5. おわりに

幼児期の「思考力の芽生え」について2年間研究をしてきたが、4歳児で「個々の活動」を中心として培われた思考力の芽生えが素地となり、5歳児では「協同的な学びの活動」を中心として、思考力の芽生えが培われていくことが明らかになった。

その中で、改めて教師自身が発達の見通しをもつことの重要性を感じた。つまり入園時から幼児の発達を踏まえて育ちの過程に寄り添いながら、どのような経験が「思考力の芽生え」につながっていくのかを意識し、一つひとつの経験の意味を考えて援助していくことが大切なのではないだろうか。これからもそのことを意識しながら、日々の保育を充実させていきたいと考えている。そしてこの幼児期に培った「思考力の芽生え」が小学校以降の学習で「思考力」を発揮することに生かされ、つながるものとなってほしいと願っている。

今後は、小学校とも連携し、子どもたちにとってよりよい接続がなされるよう努力していきたい。

<引用文献および参考文献>

- 1) 青柳宏：「五歳児後半における「協同的な学び」の展開（その1）」「宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要第28号」、五十嵐市郎・服部紀子・永松正子編，p. 219, 2005.
- 2) 砂上史子：「幼稚園じほう」，池田多津美編，p. 18, 2011. 5, 全国国公立幼稚園長会事務局「時報部」.
- 3) 文部科学省：「幼稚園教育要領解説」p. 133, 2008, フレーベル館.